

1971 ISAPの開催から G-AP東京支部の創設へ

Execution of 1971 ISAP and the development
to the establishment of G-AP Tokyo Chapter

虫明 康人*

Yasuto Mushiake

松下通信仙台研究所

Matsushita Communication Sendai R&D Labs.

1. はじめに

アンテナ・伝播研究専門委員長を筆者が務めたのは1971年4月からであったが、その年の9月始めに東北大学を会場とする1971年アンテナ・伝播国際シンポジウム（ISAP）が開催された。これに関連してIEEEとの連絡が密になり、結局、その翌年G-AP東京支部が創設されるに至った。この間の状況を、消えかかった筆者の記憶と、探し当て得た資料に基づいて若干述べて見たい。

2. ICMCIとISAP

戦後わが国で開かれた国際学会でアンテナのセッションが設けられたものとしては、1964年に東京で開かれたICMCI（マイクロ波・回路理論・情報理論国際会議）が最初であったが、本専門委員会が事実上主催したのものとしては、1971 ISAPが初めてであった。これは故内田英成博士が中心となって開かれたもので、喜連川、永井両氏が幹事を務めた。現在ではこれが第1回ISAPと呼ばれるようになっていくが、当時としては、これが継続的なものになり得るかどうかは全く考慮の対象外のことであった。分野の広過ぎたICMCIは一回限り継続せず、分野別に分割された形で発展的に引継がれる趨勢となっていた。ISAPはその一つであったと考えられる。

3. 1971 ISAP開催の舞台裏

1971 ISAPは東北大学の電気系の講義室を主会場として開かれることが決まり、開催地側の実務を担当することになった筆者等は、1968年春頃から、会場の確保、関連イベントの計画、その他の準備を開始し、仙台側実行委員会で諸計画の検討を行った。一方、全く偶然であったが、1970年1月から、当時の電子通信学会論文委員会に地方委員会の制度が発足し、電磁波関係の委員数名が毎月1回東北工大の内田学長室に集まって、査読した論文の採否を検討することになった。この委員会終了後の時間は、ISAPの計画推進のための意見交換の場として大変有効であった。このようにして十分検討して得た計画のもとに、開催日の約半年前から専従職員を2名確保して登録、庶務その他の事務を担当させた。その結果、仕事は順調に進捗した。所が、開催日が目前に迫って来た頃から些細な支障が続出するようになった。何れも当方だけの責任によるものではなく、交渉先、依頼先、発注先等の相手方がこの種の行事に不案内であったことに起因すると言えるものが大部分であった。勿論これらは、最終的には我々が不馴れでそれを予測できなかったという責任を免れ得るものではなかった。これらの処理は、結局、予定外の時間と手間が必要となり、そのためには実行委員会と全く関係のない、自分の研究室のメンバーに無理を言って頼み込むより他はなかった。特に開会の前日には徹夜に近い状態で手伝って貰い、そのお蔭でようやく準備が完了したという次第であった。最後に頼りにすることができたのは自分の研究室のメンバーであったことを思い出し、その献身的な協力と援助に対して今も深く感謝している。

* 東北大学名誉教授、東北工業大学名誉教授・顧問、松下通信仙台研究所顧問（非常勤）

4. IEEE G-A Pとの接近

1971 I S A Pの広報活動の一環として、IEEE G-A PのNewsletterの1969年5月号にアナウンスメントを掲載して貰って以来、G-A Pに我が国での活発な研究状況を宣伝するため、当研究会での発表論文名、発表者名等をNewsletterに無料で掲載するよう組織委員会の喜連川幹事から度々依頼した。その大部分は時々まとめて掲載されたようであった。I S A P終了後筆者よりその掲載の後の取り扱いについて相談した所、Editorから大変厳しい否定的な質問が返って来たので、結局、これは以後とり止めることにした。さて、1971年のG-A P PresidentはC. T. Taiであったが、同氏はI S A Pに論文を提出しそれが採択されて発表予定になっていた。所がその直前になって出席できない旨の連絡があり、その取り扱いが筆者に一任された。そこで筆者は虫明研出身のJ. R. MacDaugal (オクラホマ州立大学)に代読を依頼して発表を無事終えた。これに関する連絡その他で何回か文通をしたが、その中で筆者は、機会を見てG-A P東京支部を創設したい旨を伝えた。Presidentの立場に在った彼は、早速、創設関係のIEEE Bylawのコピーを同封して、その手続きを進めるよう激励の手紙をよこした。同氏とは1954年以来親交のあった筆者は、これが良い機会かと考えるに至った。

5. IEEE G-A P東京支部の創設

上記のような経緯により、筆者はアンテナ・伝播研究専門委員長の立場で、幹事と共に創設事務を担当したいと考え、船川幹事の賛成を得た。そして同幹事に国内のG-A P所属者名簿の整備をお願いした。筆者はそれに基づき主要メンバーによるPetition Formへの署名を集めるため、書式を仙台から、東京、伊丹、名古屋へと持参し、計14名分(12名以上必要)を集めた。このようにして書式を整えて発送し得たのは1972年3月7日であった。そして同年5月15日付で正式の認可があり、筆者がInterim Chairmanとして記録された。そこで、筆者は船川幹事をInterim Secretaryに指名し新支部が発足した。C. T. Taiの後任のJ. B. Damenteからは祝いの手紙が届いた。参考のため発足当時の役員名を第1表に示す。

第1表 IEEE G-A P東京支部創設初期の役員表

年	委員長	副委員長	幹事	備考
1971	創設準備事務開始		(虫明・船川)	President C. T. Taiの支持・激励
1972	虫明康人	——	船川謙司	5月15日設置認可、会員数170名
1973-74	喜連川隆	虫明康人	船川謙司	1973年9月G-A PはA P-Sとなる
1975-76	虫明康人	船川謙司	永井 淳	
1977	船川謙司	永井 淳	武市吉博	会員数190名

G-A P東京支部の会合以外の最初の活動として、筆者担当で内田先生をフェロウに推薦した。それは1973年4月であったが、誠に残念なことに先生はその6月に逝去された。筆者はかなりの労力をかけてすべての手続きを終えた所であったので、種々考えた末そのまま成行を見守ることにした。幸い年末には、選に入ったという知らせがあったが、IEEEへのお詫びとお礼の手紙の書き方には、大変苦勞したことを思い出す。

6. むすび

以上、筆者が専門委員長を務めた頃の、委員長としての日常業務以外の仕事の中で最も強く印象に残っている、1971 I S A Pの開催と、それに伴って派生したIEEE G-A P東京支部の創設について述べた。これらの業務を大過なく処理することができたのは、専門委員会幹事およびG-A P幹事を努めて下さった、船川謙司、永井淳、横井寛、並びに故宇田宏各氏のご努力のお蔭であり、また、安達三郎教授はじめ虫明研究室関係者の強力なバックアップの賜物である。さらに、当時の専門委員会関係各位のご協力に負う所もまた大であった。ここに深く感謝の意を表すと共に、アンテナ・伝播関係各位の今後の一層のご活躍を祈念して擲筆する。